

A 小林 かん奈

仕事をしていて、作品づくりをしていて楽しいと思うのは、やはり、天然石と唯一無二の出会いがあった時。それも他の人が綺麗ってところじゃなくて、多分これは私だけが綺麗と感じているのではないかという、何か個性を持ったりするものと出会った時はゾクゾクしますね。とっておきの入れ物に取り敢えず入れておいて、後でじっくりとカットを考えようと書いている時間が一番楽しいです。

逆に辛いときは、そういう石をうまく生かせなかった時。石はやり直しができないので、一発勝負の部分がたくさんあります。魅力的な石たちを上手く生かせなかった時は、本当に1週間ぐらい落ち込んで、ごめんねと思います。ですけど、会社の仕事をしながら少しずつ忘れて、また次の出会いがあることを信じて、やっていくというような繰り返しです。

A 飯野館長

ゾクゾクするのは、考えていたものが現実に生まれそうで、成功するだろうと思われた時、そう思って制作し、失敗する事も多く、数日間を無にすることもありますが、絶対出来るというのが見つかった時はちょっとゾクゾクする。

嫌なときは、それが駄目だと分かったとき。あとは、私の経験上の失敗を若い人達が同じ過ちを繰り返さないように、早く到達できるように伝えるという使命もあるような気がしています。教えて上達してくれた時は嬉しく、理解してもらえない時は残念に思います。

10
TH

ANNIVERSARY

山梨ジュエリーミュージアム開館10周年記念

Yamanashi Jewelry
hi Jewelry Museum



ANNIVERSARY



山梨ジュエリーミュージアム

山梨県甲府市丸の内1-6-1 山梨県防災新館1階

<https://www.pref.yamanashi.jp/yjm/>

開館時間：10:00～17:30(最終入館17:00)

休館日：火曜日(祝日の場合はその翌日)、年末年始、
その他、臨時に開館・休館することがあります。

入館料：無料

駐車場：92台 山梨県防災新館地下有料駐車場

(来館者は1時間無料)



職人情報誌『craftsman jewelry』へのご意見・ご感想をお聞かせください。

cj

craftsman jewelry

Vol.29

2024年2月発行

craftsman jewelry file.29

10th anniversary

2024 February

山梨ジュエリーミュージアム発行



さあこれから (2016)

村松 司 >> さあこれから (2016)

現在ミュージアムで行っている企画展、金属の表情展の作品の中で一番気になったのは、「さあこれから」ですね。すごくいろいろな想像させられます。アリの作品は、先ほど飯野先生からお話があったように、藝大卒業時に制作されたものから、プランタン賞を受賞された作品など、先生にとって象徴的アイコンになるような作品かなと思っております。

飯野先生の年表を拝見しますと、ちょうど藝大を退任される時に発表されているのが、この笹舟にアリが乗っている作品となっていました。「さあこれから」というタイトルのように、飯野先生がこれからも進んでいくのかなと思ひ、選ばせていただきました。その辺のエピソードがありましたら、先生にお話していただければと思います。

飯野館長

東京藝術大学では1977年から40年間指導をしました。67歳で定年となり、さあ、これからどうしようかという時に、自分で自分の区切りを付けるためにも、最初の作品に戻って、一寸法師のようにこれから流れに任せながらも、気合いを入れる意味もこめて、「さあこれから」としました。

その後、定年した年の年末に宝石美術専門学校の校長をやってもらえないかという話がありました。なんか思っていた定年後とは違うように思いましたが、宝美の初代校長が山脇洋二先生で、私の恩師だった事、現役教員にも教え子が多かった事から、「さあこれから」の中に宝美も含めるようにしようと考えました。

山梨ジュエリーミュージアム開館10周年記念トークイベント 2023.9.30

『作品の表情』

「作り手として大切にしていること」



飯野 一郎

Iino Ichiro

山梨ジュエリーミュージアム 館長
山梨県立宝石美術専門学校校長
東京藝術大学名誉教授
ドイツインターナショナル
ジュエリーアート協会会員

小林 かな奈

Kobayashi Kanna



(株)シミズ貴石
山梨県立宝石美術専門学校
卒業
手摺り研磨により宝石の表情を引き出す

甲府市内にある株式会社シミズ貴石という宝石研磨の工房に勤めておりまして、勤続9年目を迎えます。まだまだ修行中の身ということにも関わらず、お声を掛けて頂きました。

普段は宝石のカットをしています。いろいろな加工方法がありますが、私が専門としているのは、平面研磨というカットです。

小林 茉莉

Kobayashi Mari



山梨県立宝石美術専門学校
助教
東京藝術大学大学院修了
貴金属加工、七宝で緻密な
ジュエリーを制作

2年前に東京藝術大学大学院を修了いたしました。貴金属や七宝などの制作をしつつ、宝石美術専門学校の助教をしています。アート性のあるコンテンポラリージュエリーを中心に制作しております。



村松 司

Muramatsu Tsukasa

山梨ジュエリーミュージアム スーパーバイザー
工房ムラマツ主宰
七宝を中心にして「自然界」をテーマにジュエリーを制作

主に自分でイメージしたジュエリーを制作しています。そのほか、企業ブランドのハイジュエリーなどを請負う形で制作をしています。

また、2022年から山梨ジュエリーミュージアムのスーパーバイザーをしています。宝石美術専門学校でも非常勤講師として、学生の指導をしています。

僕も宝石美術専門学校の3期目の卒業生になりますが、当時の先生方から教わったことをもとに、ジュエリー業界の中ではもうほとんど使われてない古典技法を作品の中に応用しながら制作などもしています。

ここ数年、若い人たちは業界離れもありますが、宝石学校では、飯野先生の方針のもと、最先端のものを取り入れながらも、人の手で物を作ることを大事にする指導をしており、僕もすごく共感するところです。手づくりの良さも若い人たちに何とか伝えていければと思っております。

小林 かん奈 >> 筥〇△□ (2016)

私は校長先生の作品の中で、選ばせていただいたのが、こちらの筥(はこ)という作品です。

私は宝石研磨の仕事をしているので、貴金属の作品を久しぶりに拝見し、見応えのある作品ばかりでした。金属を専門としている方にとっては、当たり前だと思われるかもしれませんが、金属のように叩いて曲げられるというのが良いと思いました。

やはり、石というのは本当に加工に限られていて、私たち研磨職人は、削るか若しくは磨く、あとは切断するぐらいしかなく、本当に種類が少ない加工しか許されていません。金属は叩いて薄く出来て、さらに表面にテクスチャーを付けられる。

また、ロウ付けて接合できるという当たり前のことが、なんて素晴らしい素材なのだろうというのを本当に改めて感じました。それを一番に複合的に見られるのが、この筥という作品です。もう見た瞬間に、手に取って見たら軽いのだろうなということ、あと、この細かく丁寧につけられたテクスチャーが反射して、曲線がすごく綺麗に映し出されて、本当に貴金属のよさを引き出している作品だなと思いました。あと、三つ並んでいる佇まいも可愛く、それも含めて気になる作品に選ばせていただきました。

飯野 館長

これも2016年に作った作品ですね。リボンの作品を作る時も同じですが、形を作るときには、素材との対話が大事。素材の厚みや金属の割金などを経験などから最適なものにしていきます。こちらもお気に入りの作品です。



飛んでったバナナ

小林 茉莉 >> 飛んでったバナナ

私が大学に入学した年は、飯野先生が退任される年でした。退任展を見て、飯野先生は雲の上の存在というか、もうとても遠い存在だと思いました。飯野先生の作品はシャープ、カッコいいというイメージだったので、こちらの作品を拝見した時にすごく可愛くて、そのギャップに衝撃を受けたのを覚えています。どういった人に身に付けていただきたいかを是非伺ってみたいです。

飯野 館長

当時、NHK教育テレビで放送していた「とんでったバナナ」という歌から発想して作りました。会合などで身に付けていくと、ピンブローチを欲しい方が何人もいて、沢山作りました。その後、退任パーティーの時に缶バッジを作らしようよという話になり、いくつかの種類のものも作りましたが、みんな配ってしまい、最後の2個しか残っていません。

話が変わりますが、今、ミュージアムにて日本ジュエリー協会主催のジュエリーデザインアワードの作品展示もしております。アワードは25回を迎えますが、そのうちの半分以上、2005年から私が審査員長をしています。アワードの受賞作品は、着想・デザイン・技術に着目して審査にあたりますが、まずアイデアを優先しています。アイデアを具現化して、自分の描いたものを作るには、やはり、いろいろな素材と対話をする必要があります。アイデアが具現化して物ができて、初めて価値が出て、値段が付けられることになるわけですね。作品を作るには、アイデアを沢山持ち、成功失敗の経験をいかに多く積んでいるかということに尽きると思います。

MURAMATSU Tsukasa



トケイソウ①、パンジー②

村松 司

こちらは最近作った新作です。自分の作品のテーマとしては、自然界のものを用いて植物とか小動物などが多いです。メインに使っている素材としては七宝を多く使っています。ここ数年、七宝ブームであり、いろいろなブランドや企業から七宝の作品やジュエリーが沢山出ています。しかし、本当の七宝を使ったものは少ないのが現状です。

自分は、日本メーカーの七宝の釉薬を使っていて、写真①の作品は、プリカジュールと言って、下地がなく、スタンドグラスのように透ける効果となっています。写真②の作品は、絵付けのものでして、最近ちょっと研究しています。日本の七宝では、ほとんどこういうタッチのものではなく、自分なりにいろいろ研究していて、七宝の釉薬系ではやっぱりこういう表情がでない。最近成功した主なもので、自分でデザインを考えて、七宝にこだわらずに技法を選んでいきます。

ゲストの作品紹介

小林 かん奈

普段は企業のOEMやデザイナーさんからの依頼品を作っています。まだまだ私も未熟だということで、休みの日や仕事終わりの夜間に練習や実験も兼ねて作っていく中で、自分の中で面白いかなと思った表現があります。こちらの作品は、人工水晶を使ったルースになります。ちょっと分かりにくいかもしれませんが、片面はクリアな状態、もう片面は、ヒビが全体的に入っているような状態で接着させ、一つのルースにまとめて作ったもので、私はクラッシュクォーツと呼んでいます。

普通は傷がないところを選んで、綺麗なルースを作るというのが、宝石研磨職人の基本的な仕事の一つであります。それを仕事で数多くやっていると、それだけが魅力じゃないのだと思うことも多々あります。敢えて天然石の傷のあるところを選んでいううちに、自分でどんどん傷を作ることの面白さに気づいてしまいました。

KOBAYASHI Kanna



人工水晶のクラッシュクォーツ①
コニャッククォーツ②



Traces of Individuality

小林 茉莉

私は大学院のころから「装飾する」というのをテーマに作品を作っています。写真①の作品は、大学院の修了制作の一つで、個性の痕跡を装飾するというのをテーマに作りました。流木でして、一度、役割や役目など、人生が終わったものを装飾して、新たな価値を見出すというのをイメージして、七宝で制作をしました。中の模様は、金線と金箔の、植物の模様です。個性の痕跡なので、今までの歴史を想像して、それに合った模様をつけるということを意識して制作しました。

もう一つの写真②の作品、こちらも同じく修了制作の一つで、どちらも修了制作の20点のうち二つです。こちらは、透かし彫りという技法を使って制作をしています。

会場内からの質疑応答

Q 小林 かん奈さんへ
僕も普段制作をしていて、七宝の研究をしていました。小林かん奈さんに質問で、クラッシュクオーツについて、ここで発見したというのか、日々の積み重ねの中でずっと考えた中で生まれたものなのかなど、クラッシュクオーツに至るまでのことなど、もう少し話しを聞いてみたいです。

A 小林 かん奈
クラッシュクオーツの存在は、学生の時にミネラルショーを見に行ったり、他の作品を見たりして知ってはいました。ただ、強度に関しては、実際に自分が作ってみて、案外、大丈夫だな、これならもうひと加工、ちょっとアレンジできそうだなっていうのは感じていました。いろいろと失敗もしまして、水の温度、気温、石の炙る時間とかも、いろいろグラフ化してみたりして最適な条件を探りました。

Q 村松 司さん、小林 茉莉さんへ
宝石加工の技術や素材との関わり方というのは、すごく大切だということがわかりました。飯野先生は、素材との対話を日々積み重ねてらっしゃるってことですが、村松司さんと小林茉莉さんにも、日々の制作の中で、大切にされていることをもう少し伺いたいと思います。

A 村松 司
先ほど飯野先生のお話の中にもありましたが、やはり、アイデア、デザインを日頃溜めていけること、そういう目線を持っているということは無意識のうちに持っているような気がします。だから、どんな小さなことでも、癖のようにスケッチして書くようにしています。イメージは、どこで沸いてくるか分からないですし、デザインを全く何もないところからイメージを作るというのは結構大変だと思います。僕の場合は癖になっていますが、常にそういう目線を持っていて、その感じ方というのは、目から入ってくる情報だったり、耳から入ってくる情報だったりあります。飯野先生みたいに歌から影響を受けることもあります。

何か本を読んでいて、自分がイメージするのが消化されて形にするなど、そのイメージの着想点というのは、人それぞれだと思います。いろいろなものからのインスピレーションを僕は大事にしています。

A 小林 茉莉
私は、作品について大切にしていることは、美しいことを一番にしています。ただ美しいだけじゃなくて、苦しいくらい美しいというのを目指して制作しています。私自身、綺麗な人や綺麗なものを見るのが好きで、そういった時にすごく苦しい気持ちになることがあります。なにか憧れであったり、嫉妬であったり、そういう意味で苦しくなるのだと思います。自分の作品を生み出して、自分で見たときにも、それを感じたいし、見た人にもそう思ってもらいたいという思いで制作をしています。

A 飯野館長
なかなか高尚な話ですね。
作家というのは、何かをヒントにしたいと思っています。雑草を見ても、雲を見ても、葉っぱを見ても、いろいろそんなところからアイデアを持ってくることも多い。いろんなものが詰まっていた方がいいよということです。だけど、それを具体化ができるもの、できないものというのを、今度は選り分ける必要がある。いわゆるクラッシュクオーツにしても、作品全部をクラッシュクオーツにははいけない。

でもやはり、何かやれば、それが新しい伝統になってくるということです。過去を捨てて、新たな過去を作るというふうになります。最初は過去をしっかりと学びなさいと言うことです。

基本的なことをマスターした上で、自分の表現で自分の作品を作ります。それができたら、それに甘んじることなく、それを捨てて、また壊して、さらにその上に構築しなさいということだと思います。

非常にキツイことかもしれないですが、これはどの世界でも、同じような事ではないでしょうか。

Q 全員へ
今日はありがとうございます。それぞれ、全員の方に聞きたいです。この仕事は多分、好きじゃないとやってられないと思います。仕事の中で一番楽しいなって思う場面を知りたいと思います。逆にちょっとこれは、あんまり好きではないところもあったら教えてください。

A 村松 司
基本、仕事は大変ですよ。作業中は、本当に大変ですけど、一番達成感があるのは完成の時ですね。ただ、もうそこからある程度時間が経つと、冷めていくというか。だから、完成した瞬間からもう時間の経過とともに過去のものになってくる。だから、冷めた目になってこないとまた次のものが作れない。僕はデザインが出来てすぐ作るのではなく、いつかのために溜めておきます。そこにいろいろな条件や素材が整ったときに制作します。ある程度条件が満たされなければ、作らないですね。

ただ、自分のイメージに強く残っているものは吐き出して作らないと次にいけないです。そういうスタイルで、ものづくりを繰り返している感じです。作業中は失敗を重ねたりしますが、完成したところというのは、自分のイメージに近いものほど、楽しさが上回ります。

A 小林 茉莉
私は、一番楽しいと思うときは、撮影の時ですね。全てではないですけど、作品を作る前に、この人に身につけてもらいたいというのを決めている時があります。綺麗な人で作品のイメージに合っていて、撮影の時に美しい人に身につけてもらった時がすごく楽しいと思えます。自分の作品が、その綺麗な人に見合うってことがすごく嬉しい。
辛い時は、頭の中では生み出す前は綺麗にイメージしていても、生み出した時に思っていたのと違うとか、そんなに綺麗じゃなかった時は、すごく凹みます。いろいろ経験している最中ですが、これからも頑張りたいと思います。